

## 目黒区の文化財めぐり

平成 30 年 1 月 8 日 (月)

齋木 敏夫

10 時 30 分 36 名が目黒駅に集合、一人遅れたが雅叙園で合流、久しぶりの多人数の例会だ。目黒の「さんま」は落語で有名になり、「竹の子」は昭和の初めころまで竹林が多く、当地の重要な農産物であったそうだ。坂道を下り、大円寺を横に見て歩いた。

### 目黒雅叙園

園内に入り、豪華なエレベータに乗り、百段階段(都指定)の入り口へ行った。階段はケヤキの板材で作られた園内唯一の木造建築で昭和 3 年に造られたものだ。実数は 99 段で陽数の 99 としたそうだ。階段の途中に色んな部屋があり、まず 1. 「十畝の間」に入った。部屋の名は画家荒木十畝(ジッポ 1872~1944)によって描かれた絵で飾られていることから名付けられた。天井は吹き寄せの格天井(ゴウテンジヨウ)で各間に絵が描かれている。床柱は鉄刀木(カガヤシ)かなと思ったが確認はできなかった。長押しには 黒漆の螺鈿細工が随所に見られ、豪華な飾りが見られる。次は 2. 「漁礁の間」中国の漁礁問答の絵が描かれている。室内はすべて純金箔、純金泥、純金砂子で仕上げられ、床柱は左右ともに巨大な檜(ヒノキ)で絢爛豪華になっている。3. 「草丘の間」は格天井が秋田杉で造られ、欄間には磯部草丘(1897-1967、川合玉堂門下)の四季草花絵が描かれ、障子、建具には手の込んだ組子が施されている。4. 「静水の間」の天井及び欄間は橋本静水(1876~1943、雅邦の養子)によるものだ。5. 「星光の間」の床柱は北山杉の天然絞丸太で次の間の床柱は太い槇の樹で節が出ている。両室とも格天井及び欄間いっばいに板倉星光(1895-1964)の四季草花が描かれている。6. 「清方の間」は鏑木清方が愛着をもって造った落ち着いた静かな茶室風の室だ。特に奥の間の床柱は径一尺五寸の北山杉の天然絞丸太で非常に珍しく当時の価格で一本 3 千円、住宅 3 軒が買えた値段だそうだ。部屋いっばいに広がる豪華な生け花が飾っており、廻り廊下の北山杉の丸太を扱った化粧軒、障子建具、組子等もすばらしい。天井は四角の面を四つに区切り、その扇面に四季草花が描かれている。欄間には四季風俗美人画が描かれ、いずれも清方の作品だそうだ。7. 「頂上の間」には黒赤の光沢ある漆の板が屏風風に立てられ、オブジェが飾られていた。床柱は黒柿の銘木だそうだ。黒柿は 150 年以上経った柿の古木で 1 万本に 1 本という確率でしか見つからない稀少な材木で古代から珍重され、正倉院御物の中の宝物にも使用されているそうだ。7 つの座敷を見て階段に戻るとすぐ上が 99 段目であった。一気に百段を上がると大変だが寄り道での上りであり、楽であった。下る途中にある漆塗りのトイレを見てロビーに降りた。館内で昼食の予定であったが他の団体が予約しており、変更となった。館内を見学してロビーに集合し、外へ出た。

山手通りに向かい、通りを左に曲がり、羅漢寺の信号を右に曲がった。

### 五百羅漢寺

境内に入り、らかん亭で松花堂弁当の昼食となった。縁(フ)の高いかぶせ蓋を開けると十字形の仕切りがあり、その中に刺身、焼き物、煮物、ご飯がきれいに盛り付けてある。由来は石清水八幡宮の社僧であった松花堂昭乗(1584 年- 1639 年)がこの形の器を作り、絵具箱や煙草盆として使用していた。

昭和になり、料亭「吉兆」の主人がこの形の箱に料理を載せたのが始まりといわれる。初めて参加の方を紹介し、少しビールを飲み、楽しい食事であった。寺は1695年鉄眼禅師が黄檗宗羅漢寺として本所に開山、1908年に江東区大島から現在地に移転し、戦後浄土宗の寺となった。木造五百羅漢像は元禄時代に松雲元慶が江戸の町を托鉢して集めた浄財をもとに十数年の歳月をかけて彫りあげたものだそうだ。現在は305体（都指定）が残されている。まず羅漢堂に入り、146体の羅漢像を拝観した。本堂に通じる廊下に珍しい白沢（猓王）像（都指定）がある。人面、牛身、虎尾で額と両側の腹に各3個ずつ合計9個の眼がある想像上のもので悪い夢を食べ、よい夢を与えてくれるといわれているそうだ。本堂にはひと際大きい本尊釈迦如来坐像と迦葉（カショウ）、阿難（アナン）像が三尊形式となり、その両側及び前に羅漢像が安置されている。釈迦が霊鷲山（リョウジユセン）で説法した際、花をひねり、大衆に示したところ誰にもその意味がわからなかったが迦葉だけが真意を知って微笑したそうでこれを拈華微笑（ネゲシヨウ）という。そこで釈迦は迦葉に仏教の真理を授けたといい、それが禅宗で受け継がれ、以心伝心で法を体得する妙を示すようになり、柳宗悦（ムネヨシ）は木食仏を微笑仏（シヨウブツ）とよぶようになった。阿弥陀堂、聖宝殿を見て境内を後にした。

### 海福寺（黄檗宗）

1658年深川で開山、1910年現在地に移転した。参道の左側に二基の宝篋印塔（都指定）がある。1807年富岡八幡宮大祭の時に起こった永代橋崩落による死者440名を供養の為造立したものだ。四脚門形式の山門（区指定）を通り、本堂にお参りをして境内の石碑や石塔を見て外へ出た。

### 目黒不動 滝泉寺（天台宗）

江戸には徳川家光が江戸城鎮護の為天海僧正の具申により天台宗の寺を指定したと伝わる五色不動がある。青は世田谷区太子堂の数学院、赤は文京区本駒込の南谷寺、白は豊島区高田の金乗院、黒は滝泉寺、黄は台東三輪の永久寺だ。目黒の地名は目黒不動に因るようで、山手線の目黒駅が有名となっている。慈覚大師円仁開山という古刹、建物は戦後復元されたものだ。三間一戸、楼門形式の仁王門をくぐり、急な石段を上ると笠木の上に山形を付けた山王鳥居がある。お寺なのに鳥居とはちょっと違和感がある。本堂は初詣の人々で混雑していた。本尊は秘仏だが昨年御開帳があり、薄暗くてよく見えなかったが一応不動明王像にお参りした記憶がある。本堂の裏には膝前で定印を結ぶ銅製の大きな胎蔵界大日如来坐像（区指定）があり、お参りした。参拝を終え、石段を下ると「独鈷（トッコ）の滝」がある。独鈷の名の付く処は空海の伝説が多いがここは円仁所縁の滝だ。境内にある青木昆陽の墓（史跡）や宝形造の勢至堂（区指定）等を見て外へ出た。

### 成就院（天台宗）

この寺も慈覚大師開山と伝わる古刹、徳川秀忠側室お静の方（保科正之の母）ゆかりの寺でもある。家光は鷹狩の際当寺で僧侶から弟の存在を聞いたと伝わる。母静が正之の栄達を祈願し、大願成就のお礼に奉納した石造の秋葉大権現、准胝観音、十一面観音、阿弥陀如来像が山門の横にある。年一度の本尊薬師如来坐像（蛸薬師）の御開帳日で本堂前にはお参りする人が多数並んでいた。ようやく本堂に入ると護摩の煙が充満し、三人の僧侶が大声で薬師如来の真言「オンコロコロセンダリマトウギソワカ」を唱えている。ようやく内陣に入り蛸薬師を拝観した。蓮華座を支える蛸の姿はよく見えたが肝心のお薬師さんの尊顔は影になり、よく拝めなかった。

山門前で解散となった。寒い一日であったが心配された雨も降らず、よかった。案内していただいた森岡さんに感謝します。